

コルシカ語における新語形成

U neologismu di a lingua corsa

長谷川秀樹

Hideki HASEGAWA

はじめに

新語が形成され、定着する過程は、ロマンス語の中でも多様である。コルシカ語など少数言語、すなわちいずれの国や地域においても「公用語」ではなく、使用人口も多くなく、かつ他の優勢な言語との二言語状態（ダイグロシア）を強いられている言語と、「公用語」となっているロマンス語では大きく異なる。

フランス語を事例にあげるならば、新語を公式に制定する権威機関としてのアカデミー・フランセーズや政府のフランス語高等委員会などが存在する。他のロマンス語圏諸国においてもフランスほど国家主導的ではないかもしれないが、メディアや出版、学術教育制度など権威機関により、新語の公認が行われるのが一般的であろう。

これに対して、少数言語であるコルシカ語¹⁾には、このような権威機関は存在しない。しかしながら、コルシカ語の1970年代以降の確立は、新語が次々と生み出されてきた成果である。では、コルシカ語はどのようにして新語を作り出してきたのであろうか？あるいは新語形成においてどのような特徴がみられるのか？本稿ではかかる問題について「ロマンス語少数言語の新語形成過程」という観点から、分析、考察を加える。

I ADECECの形成と今までの活動—コルシカ語(コルシカ方言)運動史において

コルシカ語 (*langue corse*, *lingua corsa*) という概念が、「イタリア語の方言」という概念の「否定」という形で定着するのは、²⁾1960年代後半からである。だが、それ以前にも、「コルシカ方言」の語彙を豊かにしようという取り組みは行われていた。ただし、1970年代までのこの取り組みと、それ以降の新語形成は大きく異なる。ジャン・キョルボリによると、コルシカ語には史的に三段階の「練磨期」があるとし、戦後までの第一期は、島の文人たちがイタリア語、特にトスカナ方言から盛んに語彙を借用していたという。³⁾かかる文人たちはイタリアにも活動拠点を持っており、両地域を盛んに往来していたから、コルシカがイタリア言語文化圏の一部であると考えるのは至極当然のことであり、コルシカ方言を「イタリア化」することが島の文化的発展につながると考えていた。一方、戦後は、「脱イタリア化」あるいは「純化」、「ロマニア化」の過程である。特に1950年代後半から活動した言語運動「ウ・ムンテーゼ(U Muntese)」は、この動きの先駆者であった。⁴⁾戦前のイタリア語の方言としてのコルシカ方言という図式を拒否し、コルシカ語はイタリア語から派生したのではなく、コルシカ語とイタリア語は共通の「祖語」を有する、というのがその特徴で、ラテン語を基準とした語彙形成を行った。この二つの動きは、イタリア化・脱イタリア化

という点で対立は見せているが、その主体が文人であり、練磨された語彙が文芸・文学的表現に限定されていた、という点では共通している。こうした意味で「新語」形成運動とまでは言えない。

この二つの運動に対して、1970年代以降の「70年代世代」の活動は、語彙の種類が広範なことから新語形成運動と言える。キョルボリは、70年代以降を一つの練磨期として扱っているが、本稿ではさらにこれを二つの段階に分けたほうが適切に思われる。前半は80年代前半までの民間言語団体、特に ADECEC が取り組んだ新語形成であり、後半はそれ以降のフランスにおけるテレビ・ラジオ放送の地方分権化に伴う、情報メディアのコルシカ語に対する影響力が強化される現在に至るまでの時期である。

まずは、前半の「70年代世代」の新語形成について、主に ADECEC の取り組みについて言及する。

1)「70年代世代」と新語形成の取り組みの背景

「70年代世代 (a leva di u sittanta)」とは、1960年代後半から70年代前半にかけて、コルシカ民族主義が高揚する中、それまで遅れていたものとして蔑まれていたコルシカの文化全般に対する再評価を導いた当時の青年から壮年世代を指す。この時代、「ボーヂェ (voce)」と呼ばれていた伝統歌を現代的な音楽として確立するいわゆる「ポリフォニー」運動が起こり、「プエージア (puesia)」に代表されるコルシカ文学活動が起こる。⁵⁾そして、コルシカ語での学校教育を要求する動きもこの世代を中心に展開される。

当時、フランスでフランス語・外国語以外の言語を学校教育するには、文部省によりフランスの地方言語 (parlers locaux、現在では「地域語 langue régionale」と表現される) であると認められなければならなかった。1951年のディクソンヌ法は、既にブルターニュ語、カタルーニャ語、オック語、バスク語の四言語については、学校での課外教育を許可していたが、コルシカ語、アルザス語、フランデレン語などについては、「外国語の方言」であることを理由にその教育を認めてこなかった。コルシカ語は「イタリア語の方言」とみなされていたのである。⁶⁾

すなわち、コルシカ語の学校教育が認められるには、それが「イタリア語の方言」でなく、「独自の (à part entière)」⁷⁾言語とみなされる必要があった。これが「70年代世代」による新語形成の背景である。

2) ADECEC の結成と主要な活動

コルシカ島東部丘陵地にあるチェルビオーニ村を中心とする地域に1970年12月、地元教員、聖職者、史家、言語・文化運動家らが結成した ADECEC (フランス語で「コルシカ中東部における考古学、歴史学、言語学、自然科学発展協会」) もまた、「70年代世代」の運動と言えらる。この協会がこれまでに行ってきた活動は、コルシカ語の新語形成だけでなく、多岐にわたる。具体的にあげれば、i) 史跡の発見・保護・教育、ii) コルシ

カ語の保護・研究・文芸作品や辞書の作成、iii) 地域に根ざした自然科学・社会科学の発展、iv) 生徒・学生・社会人を対象とする生涯教育、v) ラジオ放送局・博物館など地域文化施設の設立、などである。⁸⁾

II ADECEC のコルシカ語に関する活動⁹⁾

次に、ADECEC がコルシカ語に関してどのような活動を展開してきたのか見てみよう。

1) 設立から 1975 年まで

まずは、地元の子供を対象に、学外でのコルシカ語教育活動を始めた(1972年)。これは、隔週水曜日(月2回)に2名の教員が、主に戦前の「コルシカ方言」のテキストを使用して教えていた。次に地名をフランス語からコルシカ語に書き換える活動を1973年から開始した。具体的にはチェルビオーニ村の全街路名をコルシカ語に変えたのである。チェルビオーニ(Cervioni)という村名もこの時フランス語のセルヴィオーヌ(Cervione)から変更したものである。また街路はイタリア語で一般に「通り」として使われている via ではなく、ルーマニア語で使われている strada のほか、carrughju, stretta と書かれることになった。1975年には村のすべての街路表示がコルシカ語で表記された特産の御影石製のものに替えられた。この動きは後の島全体の街路名の「コルシカ化」のさきがけとなる。

1974年、フランス文部省がコルシカ語の教育を容認したため、ADECEC は地元の幼稚園および小学校での教育準備に取り掛かった。だが、戦前期のコルシカ方言で書かれた作品をそのまま使用したり、俄かづくりのテキストでは限界があった。それは、対象となる世界が狭すぎて、学習者が日常生活で使うには何の役にも立たない教材というには程遠いものだったからである。¹⁰⁾このことから、コルシカ語の新語や文法書、辞書、教育法の確立が求められるようになる。しかし、フランス語のアカデミー・フランセーズのような権威機関がまったくないコルシカでは、自らがこの活動を主導していかななくてはならなかった。

2) 新語形成活動の開始

ADECEC による新語形成活動は、1976年のコルテ夏季大学(Università Estate di Corti)の開始時に始まる。コルテ夏季大学とは、1755年のパスカル・パオリによるコルシカ独立の際に2年間だけ開学されていたコルシカ大学の再開を求めると同時に、¹¹⁾島の教員や文人を集めて学校教育へのコルシカ語導入に必要な新語・文法確立・教育法を研究・開発することが目的であった。

1977年からは『リングァ・エー・テクニーガ(Lingua è tecnica)』が、夏季大学の一行事としてチェルビオーニで開催される。ここで、コルシカ語の新語形成の必要性が求められ、翌年から具体的項目別に新語を研究発表・検討する。一例を挙げれば、1978年には車・自動車・内燃機関(A Vittura)について新語がまとめられ、続く1979年には数学(A Matematica)、1980年には電気工学(L'Electonica)、1981年は哲学(A Filusufia)、言語学(A Linguistica)、

心理学 (A Psiculugia)、1982年には鳥類 (I Acelli)、1983年は地理学 (A Geografia)、サッカー (U Ghjocu di pallone)、放送・報道 (A Stampa audiovisiva)、法律 (U Dirittu)、1984年は果実および果樹栽培 (A Frutta)、金属加工 (A Paghjuleria)、家屋 (A Casa)、1985年は時間・気象・気候 (U Tempi)、1987年には狩猟 (A Caccia)、1988年は料理 (A Cucina)、1989年にはゲーム・遊戯 (I Ghjochi)、1993年にはブドウおよびブドウ栽培・醸造 (A Vigna è u Vinu) が議論され、新語がまとめられた。

3) 地方分権化と急速な情報化に伴う新たな取り組み

80年代からコルシカ語をめぐる状況が大きく変わる。それは、フランスの地方分権政策にともなう、テレビ・ラジオ放送の「ローカル化」であった。従来はパリから上意下達的に放送されていたテレビ・ラジオ国営放送の番組の一定時間枠が、ローカル局の番組作成枠として認められる。さらにコルシカ島放送分については、その番組内容の決定権が国ではなく、コルシカの地域議会に委ねられることになった。これに伴い、コルシカ島では、全国公共テレビ放送「FR3 (現在のフランス3)」の一定時間枠にコルシカ語によるローカルニュース放送と天気予報を放送することになったほか、週末の特集番組の制作権も与えられた (これには「コルシカ語劇」などが主に放送された)。ラジオについても同様に全国公共放送「ラジオ・フランス」のコルシカ放送分についてはすべて RCFM (ラジオ・ゴルシーガ・ヴレグワンツァ・モーラ) に制作権が移り、ここでもコルシカ語による放送が始まる。

しかし、時事的内容を伝える報道がコルシカ語でなされる場合、ADECECなどが開発した新語を使用するだけでは不十分であった。なぜなら ADECEC の新語形成は学校教育を念頭に置いたものであって、報道や時事ではなかった。またこの年代はコンピューターに代表される情報技術が格段に進化したこともあって、通信・コミュニケーション・情報技術に対応したコルシカ語の定着が急務となる。

こうして 1982年、コルシカ語情報データベースの作成計画が ADECEC により立ち上げられる。これは 70年代から続いている『リングァ・エー・テグニーガ』で得られた新語をさらにデータベース化し、誰でもどこからでも検索できるシステムを構築することであった。ADECEC は 1983年から補助金を得て INFCOR 計画として準備に取り掛かる。コルシカの新語に加えてすべてのコルシカ語文献からコーパスを作成し、それらをデータベース化するという壮大な試みで、完成までに実に 15年以上を要した。現在は ADECEC のウェブサイト に接続され、日本からも無料で閲覧できる。¹²⁾ i-mode など携帯端末からのフランス語-コルシカ語変換システムも完成している。¹³⁾

III 現代コルシカ語の新語形成の特徴

次にコルシカ語における新語あるいは借用語の形成上の特徴について言及する。より具体的に言えば、その借用あるいは参照体系とされるのは、フランス語かイタリア語がある

いはそのいずれでもないのか（すなわち独自性の追求か）という問題についてである。

1) 現代に至るまでのコルシカ語をめぐる地域社会的状況—「コルシカ方言」時代も含め

その前に、戦前・戦中期の状況について若干述べる。14) 当時コルシカ語は「イタリア語の方言」として位置づけられていたが、様々な流派が新語形成をめぐり対立していた時代であった。その対立とは、「ムプリスト (Muvristes)」と呼ばれていたコルシカ自治主義運動のグループと、「シルネイスト (Cyrnéistes)」と呼ばれていたコルシカ文学運動のグループとの対立であった。ムプリストらは当時、イタリア・ファシストによるコルシカの領土回収計画の一環として行われていたイタリア言語学者らのコルシカ方言研究に共鳴し、コルシカ方言の綴字化過程でイタリア語のそれを大いに参照する。一方、ファシズムを非難しフランス共和主義に忠実であらんとしたシルネイストたちはこの動きに反発し、コルシカ方言の綴字化にフランス語を参照体系とした。こうして、この時代にはコルシカ方言の複数の書法が拮抗する状況となったが、コルシカ方言の独自性を重視する動きはほとんどみられなかった。

戦後、ムプリストたちがいっせいに除去されたことにより、コルシカ方言が「イタリア語の方言」であることを否定する動きが強まる。しかし終戦直後はコルシカ方言についての研究や運動自体もファシズム視される傾向が当時あったため、このような動きが出てくるには 1950 年代半ばの「ウ・ムンテーゼ」を待たなくてはならない。「ウ・ムンテーゼ」が取り組んだのは「ガリシスム (gallicisme)」と呼ばれるイタリア語参照の拒否であった。その分フランス語への参照が強まる。「ウ・ムンテーゼ」のメンバーの多くが戦前戦中期にシルネイストであったことから当然、コルシカ方言の「非イタリア化」の動きを見せるわけだが、さらに先述のディクソンヌ法とフランス文部省は「外国語ではないフランスの地方言語」のみを学校教育において認める方針を採っていたこともこの動きを加速させる結果となった。1970 年代の ADECEC もこの動きの延長上にあるといえよう（「コルシカ方言」ではなく「コルシカ語」という概念が定着してはいるが）。

ガリシスムの事例 (いずれも ADECEC 作成の LINGUA È TECNICA より)

サッカー ghjocu di pallone (玉戯) フランス語 football イタリア語 calcio

ゴールキーパー guardianu, フランス語 gardien, イタリア語 portiere

ユニフォーム maglietta, フランス語 maillot, イタリア語 uniforme

試合 macciu, フランス語 match, イタリア語 partita

リフティング ghjuculera, フランス語 jonglage, イタリア語 (該当語なし)

監督 eserciatatore, フランス語 entraîneur, イタリア語 allenatore

車(自動車) vittura, automobile, フランス語 voiture, auto イタリア語 macchina		
バンパー	parantoppu, フランス語 pare-choc, イタリア語 respingente (paraurti)	
タイヤ	pinu, フランス語 pneu, イタリア語 gomma (ruota もしくは pneumatico)	
事故	accidente, フランス語 accident, イタリア語 incidente,	
クラッチ	imbregu, フランス語 embrayage, イタリア語 frizione,	
ガソリン	essenza, フランス語 essence, イタリア語 benzina	
その他 ⇒フランス併合後、コルシカに導入されたものはほぼフランス語からの借用		
県	dipartimentu, フランス語 département, イタリア語 provincia	
憲兵隊	gendarmeria, フランス語 gendarmerie, イタリア語 carabinieri	
駅	gara, フランス語 gare, イタリア語 stazione	
魚雷	turpiglia, フランス語 torpille, イタリア語 siluro	
航空機	avione, フランス語 avion, イタリア語 aeroplano	

2) 1980年代以降—ローカル・メディアによる新語形成権の移転と「純粋主義」

こうした戦後の動きに変化が生じるのが80年代以降、先述のフランスの地方分権政策によるコルシカ語を放送するローカル・メディアの登場である。コルシカ語を放送するテレビ局・ラジオ局はアナウンサーのみならずジャーナリストや編集担当にいたるまで、コルシカ語が話せるかコルシカ語についての知識を有することが採用条件となっていて、局内でコルシカ語研修も実施されている。

ADECECが80年代までに取り組んできたコルシカ語の新語とメディアのコルシカ語をめぐる状況は大きくことなる点がいくつかある。その一つは、ADECECは基本的には学校教育を円滑に行うための「コルシカ語」であるのに対し、メディアはより広範な視聴者を対象にしていることである。「60年代以降に生まれた者はコルシカ語ではなくフランス語が母語である」と言われるコルシカにおいて、円滑にコルシカ語教育を行うには、その新語がフランス語を参照体系とするのも道理がゆく。だが、子ども世代が学校で習うコルシカ語と祖父母世代が母語とするコルシカ語が大きく異なって、コミュニケーションが容易ではないのも事実である。一方、メディアは子どもはもとより成人、高齢者も対象にしないではいけぬ。このことがメディアのコルシカ語の新語形成に大きく影響していよう。

もう一つは、ADECECもラジオ放送「ボーチェ・ヌシュトラレ (Voce Nustrale)」を運営しているが、これはコルシカ東部海岸地域にエリアを限定したミニ FM 放送であり、要は、この地域の視聴者が理解できるコルシカ語を使用すればよいのに対して、ラジオやテレビ放送は全島カバーしている点である。これまでも言及した通り、コルシカ語は島内でも発音や語彙の面でかなり違いがある。つまり特定地域に偏ったコルシカ語では放送できず、普遍性が求められるという点である。

最後の違いは、ADECEC初期のメンバーと80年代以降のメディアに携わるジャーナリストたちの「世代」と「係争」である。言語運動のメンバーたちは、現在は世代交代してい

るが、ADECEC 設立当初は、まだ戦前戦中の運動に関わっていた世代たちがリードしていた、よって、コルシカ語の自立性を主張していたが、「イタリア語の一方言」という図式には強いアレルギーを抱いていた世代であった。一方、それより若い世代のジャーナリストたちは、戦後までのそうした対立やイデオロギーとは無縁である。また ADECEC など言語運動にとっては「コルシカ語」は防衛の対象そのものであったが、現在のジャーナリストたちからみれば、もちろんコルシカ語の発展という願いはあるものの、その防衛活動には深くコミットメントしていない。こうした点から、ジャーナリストたちはコルシカ語についてはより自由な考えを持ち、それが新語の形成にも見られる。

アメリカのコルシカ語社会言語学研究者であるアレクサンドラ・ジャフィーは、コルシカのジャーナリストたちは戦後の新語形成の主流であったガリシスムには否定的で「純粹主義」の傾向があると指摘している。¹⁶⁾コルシカ語における「純粹主義」とは、もとはムプリストの非主流派に見られた傾向で、コルシカ方言が「トスカナ（イタリア）語の方言」であることを否定し、コルシカ方言もトスカナ語も共通の祖語から派生したという考え方である。だが現在の「純粹主義」はガリシスムに対するものである。

ジャフィーはその事例として RCFM ラジオがニュースで扱った *spegnifocu* という単語を挙げる。¹⁶⁾これは「消す」「火」という二つのコルシカ語を組み合わせた新語である。だが、コルシカ語科目として現地学校で使用されるテキストでは、「消防士」は既に ADECEC など言語団体がフランス語から借用した *pompieru* がほとんど使用されている。¹⁷⁾

ジャフィーはそれ以上「純粹主義」と「ガリシスム」については言及していない。それ以外の事例を幾つか示すと下記ようになる。

日本語	フランス語	ガリシスム	純粹主義
労働者	ouvrier	uvrieri	lavuranti
生きた	vécu	vecutu	campatu
全会一致	unanimité	unanimità	tombula ¹⁸⁾
比較	comparaison	cumparazioni	paragonu
侮辱	affront	affrontu	scherzu ¹⁹⁾
消費する	consommer	cunsummà	frazà
眼鏡	lunettes	lunetti	spichjetti ²⁰⁾

まとめ

コルシカ語のような少数言語は、国語や公用語である言語とは違い、新語の形成や定着に関して公的な権威機関が欠如している。その結果として新語形成については、多様な主体が多様な方法で行うこととなった。戦前期は主としてイタリアとの間を往来していた文人たちによるもので、もちろん標準のイタリア語を参照していた。だが、戦後はイタリア語への参照は見られなくなり、むしろそれより距離をとる形でコルシカ語の新語形成がな

される。これは、1960年代から80年代にかけてコルシカ語教育の必要性が叫ばれ、そのために学校教育に向いている新たな語彙の形成が必要であったからである。教育上の実用性の面から、ADECECなどの民間文化団体が取り入れた公用語であるフランス語からの借用・援用を多用する(ガリシズム)。80年代からローカルメディアがコルシカ語を使用し始めるが、特定の世代や地域に偏らないコルシカ語の必要性からガリシズムよりロマンス語やラテン語に依拠する「純粋主義」を採用する。このように、コルシカ語の新語形成は現在、ガリシズムと純粋主義の二つの要素からなる。

註

- 1) フランスではフランス語以外の諸言語は、ロマンス語(コルシカ語、フランコプロヴァンス語、オック語、カタルーニャ語など)も含めてこんにち「地域語(*langues régionales*)」と呼ばれるのが一般的で、少数言語とは呼ばれない。こうした状況については、Jean Sibile, *Les langues régionales*, Flammarion, 2000, pp.8-13,を参照されたい。「マイノリティ」というニュアンスをもつ「少数言語」という表現を用いることは、「平等」と「個人主義」が建前であるフランス共和主義理念に反する「差別」、あるいは「集団的権利」を導入することにつながりかねないからである。ただ、本稿では、単に使用者数が少ないという意味において「少数言語」と表記している。
- 2) コルシカ語研究において、コルシカ語が「イタリア語の方言」であるとする見解は今日フランスでは完全に否定されている。「ロマンス語」もしくは「イタロ・ロマンス語」の一方言という見方が一般的である。既に1965年に当時エクス・マルセイユ大学にあったコルシカ地域研究センターの所長でコルシカ語研究者のジャン・アルベルティニは「コルシカ語はイタリア語の方言などではなく、ロマンス語の方言である。古イタリア語よりは、ポルトガル語やスペイン語、モナコ語やカタルーニャ語、あるいはフランス語など他のロマンス諸語に、またラテン語に類似しているのである」と言及している(Jean Albertini, *Petite grammaire corse*, Editions du CERC, 1968, p.17)。なおこの引用箇所は、アルベルティニが1965年地元紙『ル・プロヴァンサル』の1965年9月10日から13日にかけて掲載された記事を著書にまとめたものに拠る。また、Jacques Thiers, *Papiers d'identité(s)*, Albiana, 1989, pp.11-12も参照。
- 3) Jean Chiorboli, *La langue des Corses; Notes linguistiques et glottopolitiques*, thèse de Doctorat d'Etat, Université de Rouen, 1991, p.123
- 4) 「ウ・ムンテーゼ」の詳細は、Jacques Fusina, *L'enseignement du corse, histoire, développements, perspectives*, Squadra di u Finusellu, 1994, pp.119-122, Pascal Marchetti, *La corsophonie*, Albatros, 1989, p.177を参照。
- 5) ポリフォニーの形成については、拙著『コルシカの形成と変容』三元社2002年118~120ページ、拙論「コルシカ島の『現代』音楽—ポリフォニー」『青淵』681号2005年32~35ページおよび「コルシカ文化論概論」『青淵』656号2003年54ページ、Philippe-Jean Catinchi, *Polyphonies corses*, Actes Sud, 2000, pp.31-37を参照されたい。
- 6) Antoine Ottavi, *Des corses à part entière*, Seuil, 1979, pp.100-101, Fusina, *op.cit.*, p.115, Marchetti, *op.cit.*, p.179
- 7) Ottavi, *op.cit.*, pp.100-101
- 8) ADECEC, *ADECEC de 1970 à 1990, n.d.*,活動の詳細はホームページ <http://www.adecec.net>にて閲覧可能。
- 9) この章における具体的な ADECEC の活動については、すべて ADECEC, *ADECEC de 1970 à 1990, n.d.*,に依拠している。

¹⁰⁾ *op.cit.*, pp.7-10

¹¹⁾ コルシカ大学は 1981 年にコルテに「再開」される。

¹²⁾ <http://www.adecec.net> を参照。

¹³⁾ <http://imode.adecec.net/>

¹⁴⁾ 詳細は、拙著 2002 年 30~34 ページのほか、拙論「生成される『少数言語』—『コルシカ語』の形成と知識人の関係についての社会言語学的分析」『立命館言語文化研究』9 巻 4 号、1998 年 15~16 ページ、および「戦間期フランスの自治主義運動—コルシカを事例に」前掲書 9 巻 5-6 号、1998 年 79~83 ページ、Antoine Leca « « A Muvra » ou le procès de la France par les autonomistes corses (1920-1939) » M. Ganzin (dir.) *L'Europe entre deux tempéraments politiques*, Presses universitaires d'Aix-Marseille, 1994, pp.524-544, Antoine Leca, « « A Muvra » ou l'autonomisme corse de la réhabilitation de l'Italie à la tentation fasciste (1920-1939) », Ganzin, *op.cit.*, pp.545-564, Marchetti, *op.cit.*, を参照。

¹⁵⁾ Alexandra Jaffe, *Ideologies in Action : Language Politics on Corsica*, Mouton de Gruyter, 1999, p.266

¹⁶⁾ *op.cit.*, pp.266-267

¹⁷⁾ コルシカ大学の学生数名に尋ねたところ（これらの学生は先祖代々コルシカに居住しているいわゆる「コルシカ人」）、*spagnifocu* はほとんど聞きなれない、*pompieru* が普通だと言及している（2006 年 5 月）。一方、小学校テキストでも *pompieru* もしくは *pumpieru*（南部）である（*Eli Dizziunariu à figure corsu Junor da 7 à 11 anni*, DCL éditions, 2000, p.55,）

¹⁸⁾ 2001 年 7 月 30 日、テレビ「フランス 3」のローカルニュース「オートコルス県議会予算案全会一致で採択」のコルシカ語での放送。ただし、フランス語での *tombola*（くじ引き）、イタリア語での *tombola*（ビンゴゲーム）という意味にも使用されている。

¹⁹⁾ 『ウ・リボンブ (U Ribombu)』2006 年 10 月号記事。U *scherzu fattu à issu populu hè guasgi duvintatu un genaru litterariu*. フランスの政治風刺誌で知られる『チャーリー・エブド』がコルシカ民族主義を皮肉る記事を掲げたことに対する批判。

²⁰⁾ ただし、コルシカ島内の教育を管轄するコルシカ学区 (Académie de Corse) の通達では、学校教育現場で *spichjetti* を使用するよう勧告している。B.O. hors-série n° 2 - 19 juin 2003 *Programme des langues étrangères et régionales à l'école primaire* Académie de Corse